

# 不確実性の管理・運用と医療化

## —発達障害児の支援者と当事者の語りから—

お茶の水女子大学大学院 木村 祐子

### 1 目的

本報告は、1990年代中頃から、子どもの不適応や逸脱が「発達障害（自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害、学習障害、ADHD など）」の診断で解釈され、支援の対象になりつつあることを「医療化（medicalization）」の枠組みでとらえ、支援者と当事者（親）が医療実践で生じる「不確実性（uncertainties）」をいかに管理・運用していくのかについて分析し、医療化論を再考することを目的とした。

### 2 先行研究と方法

医療実践における曖昧さや不確かさは、「不確実性」の概念で説明され、不可避な存在として批判的に考察されてきた（Fox 2000）。こうした批判は、不確実性の存在自体に対してというよりも、それらが医療関係者（特に医師）によってうまく管理・運用されることで隠蔽され、人々が不確実性の存在に気づきにくくなっていることに対してなされてきた。実際、人々の健康志向は高まっており、医学に基づいた予防・管理が賞賛される一方で、不確実性は軽視されがちであった（Fox 2000）。しかし、不確実性を管理・運用する担い手は、もはや医療関係者だけではなかった。報告者は、これまでに小学校、療育施設、矯正施設で発達障害児の支援に関わってきた支援者を対象にインタビュー調査を実施してきた。それらのデータに基づくと、支援者だけでなく、当事者やその周辺者は、早期に不確実性の存在に気づいており、不確実性を高度に管理・運用しようとしていた。このように、人々が不確実性を経験し、それらをうまく管理・運用することが当たり前のように求められるエトスが蔓延しはじめていた。

Gabe らによれば、医療の不確実性には「医学上の不確実性」、「機能上の不確実性」、「不安としての不確実性」の三つの類型がある（Gabe et al. 2004）。なかでも「不安としての不確実性」は、当事者が不確実性に直面した際に抱く不安や葛藤を意味しているが、これまで十分に検討がなされてこなかった。不確実性が医療実践において避けられないものであり、支援者と当事者の両者によって管理・運用されているのであれば、医療化論を不確実性の観点から再考する必要がある。

そこで、報告者は、小学校、療育施設、矯正施設の支援者と発達障害児の親を対象に実施したインタビュー調査に依拠して、支援者と当事者（親）が医療実践における不確実性をいかに管理・運用していくのかについて明らかにした。

### 3 結論

発達障害児の支援者と当事者が一緒になって不確実性を管理・運用することで、医療化は促進した。医療化とは、不確実性の管理・運用の程度（うまく管理・運用できているか、できていないか）の結果であった。こうした人々による不確実性の管理・運用が当然のように行われる社会をフーコーの生権力論に基づいて検討した。

#### <参考文献>

Fox, Renée C., 2000, "Medical Uncertainty Revisited", Albrecht L., Gary, Fitzpatrick, Ray, Scrimshaw, Susan C. ed., *The Handbook of Social Studies in Health and Medicine*, Sage:409-425.

Gabe, Jonathan, Bury Mike, Elston, Ann, Mary, 2004, *Key Concepts in Medical Sociology*, Sage.